# 【水と向き合う】

千葉県　翔凜中学校　二年　吉田　梨乃

『水ってこんなに重たいの？』

銀色の大きなバケツいっぱいに入れられた水を持って私は思いました。大人が言うには約六リットルの水が入っているようです。

私が小学校二、三年生の頃の話です。私は夏休みの半ばに、ユニセフの方々の講演会に参加できる機会を頂き、たくさんのことを知ることができました。

ユニセフ（Unicef）とは、国際連合児童基金（United Nations International Children's Emergency Fund）と称し、戦後の緊急援助のうち子どもを対象とした活動を行っている方たちのことです。

ユニセフの方々が見せてくださった映像には、自分よりも小さい子ども達が、水をいっぱい入れた大きなポリタンクを頭に乗せて、長い道のりを歩いていました。しかもタンクに入った水はにごった汚れているものでした。

それでは日本はどうでしょう。そのような光景を私は見たことがありません。じゃ口をひねれば、透明で飲める水が出てくるからです。

しかしそれは、当たり前のことではありません。今でも約六億三百万人の人々が池や川湖、整備されていない井戸などから水を汲んでいる状況にあるのです。また、水汲みは子どもたちの仕事であり、三百三十万人を超える子どもたちが行っています。そのため、学校に通う時間も体力も残されていることはあまりありません。

また、水を手に入れることができたとしても、それは、泥や細菌が危険な水です。しかし、生きていくために水は必要不可欠なものですから、飲まないという選択をするのは簡単なことではありません。

そして、浄水処理もせず、水を飲んだ抵抗力の弱い子どもたちは下痢などの症状を訴えるのです。肺炎など様々な病気にもかかりやすくなってしまったのです。

つまりこれから必要なことは、十分な水の確保、病気予防の知識を普及させることだと思います。『そうするためには？』自分なりの考えが生まれてきました。

まず最初に、子どもたちが水を汲みに行くことをなくすべきと考えました。家の近くにきれいな水がある井戸ができれば、遠くまで汲みに行っていた時間が無くなり、学校に通うことができる子どもたちが増えます。学校では文字の読み・書きをしっかりと勉強できるのはもちろん、「どうやったらもっと水が手に入るのか」「病気を防ぐにはどうすればいいのだろう」と衛生習慣なども学ぶことができます。

次に、子どもたちの将来についてです。学校で勉強が受けられる人とそうでない人では、仕事などに対する考え方が違うと私は思っています。勉強したことを通して、たくさんの価値観・意見が生まれて、一つのものがより良いものに変わっていくものだと思います。

最後に、子どもではなく大人についてです。ユニセフなどの研修をして、修理や部品交換などの技術を学ぶことができます。つまりは学校などで勉強することができるものよりもさらに、専門的な知識を得ることができるのです。そして、それらの知識を子どもに教えて、伝えていくことができ、きれいな水を未来まで維持できると考えました。

私が、ここまで「水」について考えることができたのは、あの時・あの映像を見て新しい発見をしたからだと思います。一番印象に残っていたのは、小さい子どもが全く笑っていなかったことです。今の自分たちは、水が出ることが当たり前という考えの人が多いと思います。ですが、地球上を見渡すと、その考えは間違っているというのが事実です。水の大切さを考えながら、使い方を改めて生活していきたいなと思いました。